

不思議な縁

橋本 茂

定年を迎え、人生を振り返るとき、人との関係に不思議な縁を感じる人が多い。

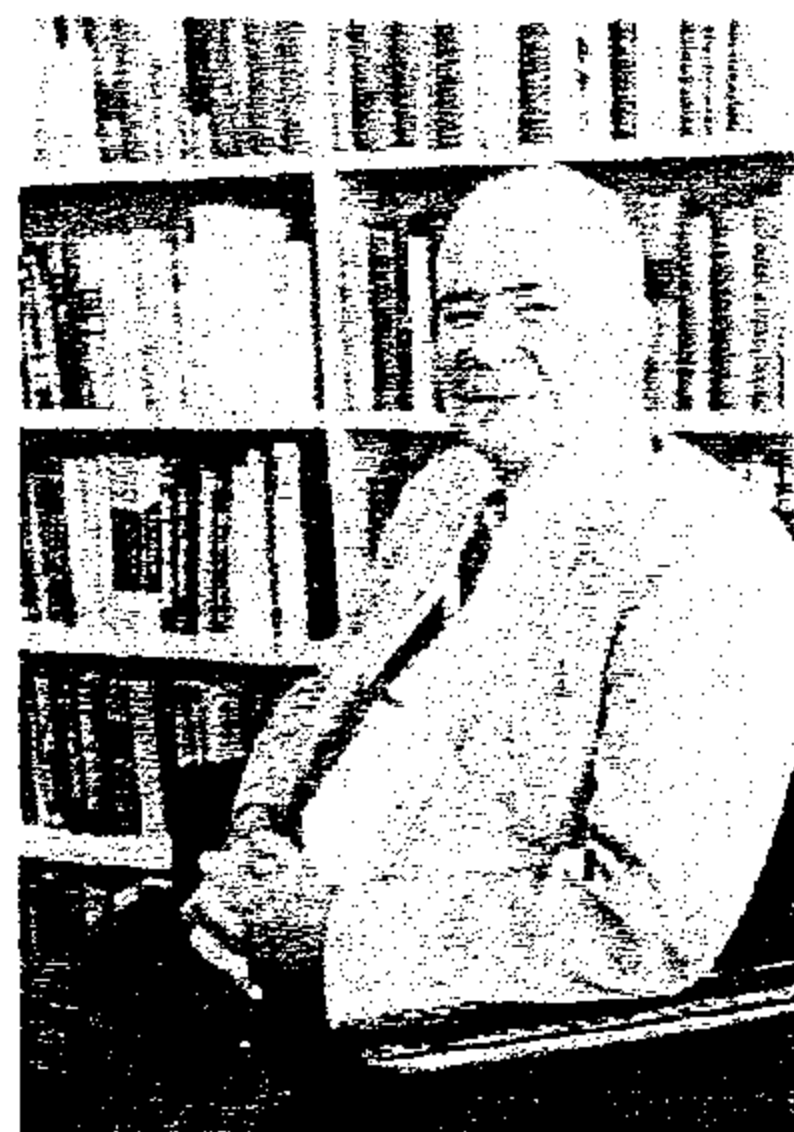


この写真は私の両親と兄弟三人が写った最初にして最後の写真である。父の隣に座っている可愛い坊やが私である。撮影は昭和19年(1944年)6月11日である。その翌日、父は多くの町民に送られて沖縄に出兵し、一年後の昭和20年6月戦死し、帰らぬ人となった。そのとき母は26歳であった。

翌年、昭和21年12月21日明け方、我が家は南海大地震により倒壊し、祖母と兄と従姉妹は家の下敷きとなり、兄と従姉妹は幸いにも助かったが、祖母は圧死した。母は私と弟を両脇に抱え、倒壊直前に雨戸を蹴破って脱出した。私たちはすべてを失って、町の建たない畳もない板敷きのバラックで生活することになった。

昭和23年、私は叔母のところに養子として出た。そして、三和小学校、土佐中学校、土

佐高等学校、明治学院大学、東北大(大学院)と卒業して、そして、昭和43年明治学院大学の社会学部に勤務することになった。私は大学、大学院で、当時世界の注目を集めていたハーバード大学のG. C. ホーマンズの小集団論



や交換理論を研究し、その成果を大学で講義した。

昭和47年(1972年)、ある日突然、『手記 沖縄で散華した戦友』というガリ版刷りの小冊子が、高知県の田舎の見知らぬ人から送られてきた。それは父と戦場を共にし、父の戦死を見届けた戦友からであった。「万一生き残って帰れたら、帰った者が家に伝える」という約束の実行であった。養子に出ていた私をやっと探し当てての約束の実行であった。その手記には、私の父との沖縄での楽しかった交遊のひと時と戦場での悲しい別れが綴られていた。

「もうその頃は沖縄野戦では戦う兵隊には暦のなければ時計もありません。何月何日もないし、ただ昼と夜があるだけでした。ある夜、『ひばり山』の攻撃に行く途中、その方向に進んでいる時、敵の迫撃砲弾が近所に落下しました。折悪しくそのところは固いコンクリートの上で、畑や山に落ちた時と違って破片の散乱がひどく7人の戦死者を出しました。私も左大腿部と右腕に傷を受けました。私が気付いた時には山中君(注:私の父)と他の戦死者が側の草むらに葬られておりました。……物量を誇る米軍は撃ちまくり、赤土の禿山になった沖縄本島では、激戦地であった山中君のお墓へも米軍の爆弾が雨あられのように落ちたことでしょう」。これが、私の父が戦死した状況であった。

昭和 47 年 (1972 年)、私はこの手記の写しを厚生省に送り、国の責任で父の遺骨を捜し、家族のもとに返すように手紙を出した。しかし、結局は、私自身が戦没者遺骨収集団のメンバーとなって、昭和 48 年 (1973 年) 2 月上旬の 2 週間、沖縄での遺骨収集に携わることになった。約 300 体の遺骨を集め、沖縄の中央納骨堂に納めた。



私はこの頃、ホーマンズの著作 *Social Behavior, 1951* (初版) の翻訳を行っていた。沖縄での遺骨収集の暇な時に推敲するつもりで、訳稿を持参していた。結局、そんな余裕はなかった。遺骨の作業を終えて帰宅した後、翻訳のことなどの問い合わせでホーマンズに手紙を出した時に、この沖縄での体験を書き添えた。すぐに、彼から返事が来た。彼は私の手紙に驚いたようであった。その手紙には、私の父が戦死した、その沖縄の戦場に彼がいたこと、8 月 15 日、沖縄湾の戦艦で勝利を祝ったこと、その祝宴の真っ最中に、最後の特攻隊の来襲があり、船上は大混乱になったこと、また、九州南部への上陸部隊の隊長として戦死を覚悟していたことなどが書かれていた。

昭和 53 年 (1978)、*Social Behavior 1974*

(改訂版) の訳本『社会行動』(誠信書房) が出版された。これが縁となり、私は昭和 55 年 (1980 年)、ホーマンズ先生の下で客員研究員として社会学の研究をすることになった。



留学から帰って数年後、私は、留学のために英国に行く息子家族を見送るために北海道から出てこられた一人の紳士と成田空港近くのホテルで会った。その方は沖縄戦で、ほとんどの戦友が亡くなっていく中で九死に一生を得て生還された方であった。私はその方から「戦争の醜さの極致」と言われる沖縄戦での生々しい体験を聞かせてもらった。その方とは、実は、現明治学院大学学長 大西晴樹先生のご尊父であった。

今、私にとって一番うれしいことは、父がホーマンズと銃を構えた摩文仁の



丘に『平和の礎』が建てられ、そこに沖縄戦でなくなったすべての人の名前が刻まれていることである。私の父「山中栄」の名も刻まれている。戦死者をワン・オブ・ゼムとしてではなく、一人一人の名前を挙げ、等しく慰霊する『平和の礎』は、大きな戦火で苦しみを受けた沖縄県民からの私たちへの大きな贈物だと思い、感謝している。

(はしもと しげる 所長・社会学部教授)

